View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by University of Toyama Repository

—論文—
高岡短期大学紀要　第17巻　平成14年３月
Bull. Takaoka National College, Vol.17, March 2002

モダニズムとポストモダニズムの共存
――エーコの『薔薇の名前』の場合

村　上　恭　子

要　旨

ポストモダニズムは、1960年代前後に台頭してきた大衆文化を中心とする新しい文化形式、およびポスト構造主義理論から派生した哲学的思想を一般に指すとされている。今日ではすっかり文化・社会に定着したポストモダニズムもさまざまな問題点が指摘されるようになった。認識論的、文化論的な相対主義や多元主義、アイデンティティの解体、現実と表象、あるいは記号表現と記号内容の乖離といった点である。これらの特質は、過去の一義的で画一的な意味や秩序体系の拘束から人々を解放してくれる反面、混乱、無秩序、方向感の喪失をもたらしているからだ。その意味では、ポストモダニズムと、現在もなお存続するモダニズムの意義を再検討し、それぞれの問題点を的確に理解することは大切である。ウンベルト・エーコは、ポストモダニズムを年代的に規定されるべき思想とは捉えず、社会・文化的に危機を迎えた時代に見られる一つの精神的態度、ないしは一つの行動様式と見なし、記号論的視点からポストモダニズムの問題点を鋭く作品に描いてきた。本論は『薔薇の名前』を中心に、具体的事例を通してモダニズムとの対比のなかでポストモダニズムの問題点を考察し、両者の相補性を論じたものである。

キーワード

ポストモダニズム、モダニズム、不確定性、二項対立、権力への意志、多元的世界、批判的理性

ポストモダニズムは、今日、社会・文化の隅々にまで深く浸透し、日常風景の一部としてすっかり馴染みのものになった。その特質が多種多様なために、依然として曖昧な部分を有しているものの、問題点もさまざまに指摘されるようになった。とりわけ問題となっているのは、認識論的、文化論的な相対主義や現実の多様性、多元性、これまでの統一され固定されたアイデンティティや現実の表象の解体、現実と表象の区別の解消、リオタールのいう「偉大なる物語」の解消といったポストモダニズムの核心にある理念である。こうした理念は、過去の一義的で画一的な意味やヒエラルキー的秩序をもった価値体系の拘束から人々を解放し、新しい創造的自由を与えてくれる反面、無秩序、混乱、方向感の喪失をもたらし、現実の問題に対してアイロニカルな態度しか取り得ないとして批判されているのである。諸刃の剣ともいえるこうしたポストモダニズムの側面をどのように評価すべきか。私たちの社会・文化になおも存続するモダニズムの側面と、新たに生まれたポストモダニズムとは、どのように実際に使い分けられているのであろうか。本論では、イタリアの記号論の大家であり、かつ文化評論家、作家であるウンベルト・エーコの『薔薇の名前』(1980)を中心に，こうした点を考察してみたい。

Ⅰ モダニズムからポストモダニズムへの推移

作品分析に入る前に、モダニズムからポストモダニズムへと文化潮流が変化した歴史的過程を概略し、各々の特質を整理しておきたい。

ポストモダンという用語そのものは、フランスの思想家リオタールが『ポストモダンの条件』(1979)で使用して以来定着したが、一般に注目されだしたのは、英訳がフレデリック・ジェイムソンの序文付きでミネソタ大学出版局から出版された1984年以降といえるであろう。ただし、ポストモダンの現象が実際に現れるようになったのは、これよりさかのぼり、反体制文化が開花した1960年代とも、その前段階の50年代、あるいは以降の70年代とも言われている。ジェイムソンによると、モダニズムからポストモダニズムへの移行は、資本主義文明自身が大きく変化したことに起因している。すなわち後期資本主義、あるいは多国籍資本主義による根本的な再構築から新しい経済秩序が誕生し、情報を基礎とする「脱工業化」社会が出現したこと、そのために人々の「感情の構造」が変化し、社会・文化の支配的理念に見られる大きなパラダイムも変化したためである。ジェイムソンはこの点を次のように述べている。

The fundamental ideological task of the new concept . . . must remain that of coordinating new forms of practice and social and mental habits (this is finally what I take [Raymond] Williams to have in mind by the notion of a 'structure of feeling') with the new forms of economic production and organization thrown up by the modification of capitalism — the new global division of labour — in recent years. (Jameson 1991 : xiv)

具体的に述べるならば、資本主義の中心は、労働者と生産の問題から消費者と消費の問題へと移行し、経済活動では、経済危機とその後の再編成がポスト・フォード主義をもたらした。また電子工学、コンピュータ等の新しいテクノロジーの発達が、ＩＴ革命を生み、情報化時代、ネットワーク社会、グローバルな経済へと一連の変化の方向付けをした。あるいはまた、資本家と労働者の対立構図とは異なる新しい権力関係や、芸術の商品化、ハイパーリアルな世界、バーチャル・リアリティ文化等が登場したのである。

では、モダニズムとポストモダニズムはどのように異なるのであろうか。モダニズムと一言で称しても、およそ200年も存続してきたこの一種の哲学的概念は、時代により、場所により多種多様な文化形式、感性となって表われている。デヴィッド・ハーヴェイは、ボードレールの「近代生活の画家」の一節——「モダニティとは、一時的なもの、うつろい易いもの、偶発的なもので、これが芸術の半分をなし、他の半分は、永遠のもの、不易なものである」(Baudelaire 1987：150)—— にモダニズムの本質を見出している(Harvey 1989：10)。モダニズムには、一時的で変化して止まない不安定な側面と、永遠に不変な普遍的側面という相反する二つの特質のあいだを揺れ動く傾向が見られるのである。18世紀に興隆した啓蒙思想は、モダニズムの哲学的、実践的理念を唱えていると見なされているが、そこにもこの二面性は反映されている。啓蒙のプロジェクトは、合理的理性、客観的科学が目指す普遍的価値、論理、法を信じて、その実現による人類の解放、自由、進歩を目標とした。しかし普遍的に変わらぬ世界を目指しながらも、人類の真の進歩と解放を実現するためには現在をさらにより良いものに変えなければならない。この発展進歩の志向が、変革、革新を歓迎し、現在を束の間のものに変え、創造的破壊と不安定で人間を疎外する状況を恒常化させたのである。また目的を達成するための道具的理性は、官僚的合理性という「鉄の檻」を作り、支配

と抑圧の権力を正当化したことは、マックス・ウェーバー等の多くの社会学者がすでに指摘した通りである。

1848年以降、パリで始まった知的・美学的モダニズムにも同じことが言える。次から次へと目まぐるしく移り変わっていった一連の新しい実験的美学表現――印象主義、キュービズム、野獣派、ダダイズム、シュールレアリズム、表現主義、写実主義等々――は一見、ポストモダニズムの美学的表現と区別し難いところがある。しかし、モダニズム芸術には、多様な全体を統一する一つの真実、表には隠れている確固とした普遍的世界を表現しようとする姿勢が見られるのである。

イーハブ・ハッサンは、こうしたモダニズムとポストモダニズムの相違を次のように細かく具体的な項目を挙げて比較している。

Modernism	**Postmodernism**
Romanticism/Symbolism	Pataphysics/Dadaism
Form（conjunctive, closed）	Antiform（disjunctive, open）
Purpose	Play
Design	Chance
Hierarchy	Anarchy
Mastery/Logos	Exhaustion/Silence
Art Object/Finished Work	Process/Performance/Happening
Distance	Participation
Creation/Totalization/Synthesis	Decreation/Deconstruction/Antithesis
Presence	Absence
Centering	Dispersal
Genre/Boundary	Text/Intertext
Semantics	Rhetoric
Paradigm	Syntagm
Hypotaxis	Parataxis
Metaphor	Metonymy
Selection	Combination
Root/Depth	Rhizome/Surface
Interpretation/Reading	Against Interpretation/Misreading
Signified	Signifier
Lisible（Readerly）	*Scriptible*/（Writerly）
Narrative/Grande Histoire	Anti-narrative/*Petite Histoire*
Master Code	Idiolect
Symptom	Desire
Type	Mutant
Genital/Phallic	Polymorphous/Androgynous
Paranoia	Schizophrenia
Origin/Cause	Difference-Differance/Trace
God the Father	The Holy Ghost
Metaphysics	Irony

Determinacy …… Indeterminacy
Transcendence …… Immanence
(Hassan, 1985, 123−4)

モダニズムにおいては、「父なる神」を頂点とした「ヒエラルキー」が揺るぎない世界を作り、各々の階層は確定した「ロゴス」に従い「支配」、ないしは「従属」の関係を維持している。価値体系に合わせた「中心化」は、父なる神の他に、家父長制ないしは男性の支配を象徴する「男根崇拝」や、マルクス主義をはじめとする「偉大なる歴史(物語)」にも表れている。世界とそれを構成する事物やその意味は、「解釈」できる「確定性」をもっており、「シニフィエ」、「意味論」、「目的」「デザイン」に対する懐疑は見られない。シニフィエは「暗喩」によって一義的にシニフィアンと直結している。仮にその真実、本性が存在しないように見えても、表面から隠れた「側根」や「深層」として必ずや「現前」するのだ。この世のすべての現象は「起源」と因果律にそった「原因」があるため、理性によって合理的に解明できる。すべては「パラダイム」と「支配的な記号体系」に従って固定した「形式」のなかに統合され、「ジャンル／境界」は明確に区分されて決して融合することはない。他方、モダニズムの反動として生まれたポストモダニズムは、これとは対照的姿をとる。構造主義言語学理論、認識の相対性を示す物理学、深層心理学、世界の多様性等々の洗礼を経て生まれたポストモダニズムは、万事を「不確定性」として捉える。解釈できる固定した意味、あるいはヒエラルキーをとる価値体系、秩序の代わりに、「反解釈」、「レトリック」、「並列」、「精神分裂症」的イメージ、「無秩序」を表現する。目的、デザイン、因果律には、「戯れ」、「差異」、「偶然」を提示する。一義的な画一性には、多義的な多様性を、支配的な記号体系には、「個人言語」を、形而上学には「アイロニー」を、全体を統合する創造には、「脱構築」と「反定立」をもって応じる。偉大なる物語への信奉は薄れ、「卑小な歴史」が描かれる。家父長制や男性優位は否定され、「両性具有」と柔軟な形態が好まれる。シニフィエが曖昧となったため、シニフィアンのみが浮遊し、意味は「喚喩」で表現される。ポスト構造主義の主要な教義によって統一的主体が否定された結果、人のアイデンティティも解体されてしまう。ハッサンの図式をいささか乱暴に概説すると、このようなモダニズムとポストモダニズムの相違が指摘できると思われる。

II 『薔薇の名前』のポストモダニズム的フレーム

本作品は、まだ若い見習修道士だった頃のアトソン(Adso)が、彼の師となるフランチェスコ会修道士バスカヴィルのウイリアム(William of Baskerville)と共に、1327年11月に北イタリアのベネディクト会修道院を訪れ、そこで遭遇した一連の事件について、後に回想録の形で物語る内容で成り立っている。歴史的背景を見る限り、モダニズムもまだ出現しない中世の末期ではあるが(モダニズムが現れた時期に関しては諸説があるが、一般に資本主義が明確な形をとるようになった18世紀末に生まれたとされる)、作者は舞台にモダニズムからポストモダニズムへと向かう精神世界との類似を見ていたと思われる。エーコはポストモダニズムを「年代的に規定されるべき思潮ではなくて、むしろ、一つの精神態度、または、より正確にいえば、一つの行動様式、一つの芸術意欲」(Eco 1984：74)と見なしている。各時代にはそれ独自のポストモダニズムがあり、危機の瞬間が存在したと考えているのだ。

作品世界の導入部において読者がまず意識するのは、「間テクスト性」がもたらす真相

に対する「不確定」で曖昧な要素、起源への疑問、解釈の介入、記号と意味内容の変質といったポストモダニズムに馴染みの問題である。ウイリアムとアトソンの体験記は、14世紀末になって老いて死を間近に控えたアトソンの回想記としてラテン語で書かれたものがオリジナルとなっている。だが実際の作品は、作者エーコとおぼしき男のイタリア語翻訳による1980年出版の版になっている。アトソンの手記は1600年代にマビヨン(Mabillon)によってラテン語のまま復元された。この復元版は、1842年にヴァレ(Vallet)修道院長によりネオゴシック調の晦渋なフランス語へ翻訳され、パリで出版される。この版をエーコとおぼしき男が1968年に入手し、ゆえあって緊急にイタリア語に翻訳したが、このフランス語版をなくしてしまったことになっているのだ。フランス語によるネオゴシック調の晦渋な文章を慌ただしくイタリア語に訳した粗雑な訳本であることに加え、ヴァレ版の出典箇所の信憑性に対するさまざまな疑惑や、アトソンの正体への疑問などをエーコとおぼしき男が指摘しているため、作品世界の確実性は最初から揺らいでいる。読者はまた、ドイツ人アトソンによる14世紀のオリジナルが、後に異なる時代に３人による仲介を経て、異なる言語へ翻訳されたことによる変質も考慮しなければならない。『薔薇の名前』の原書はイタリア語であるため、実際の読者の大多数は24カ国語(1990年代初頭の時点)に訳された各翻訳書を読むことになり、さらにもう一人の訳者による介入を経ることになる(筆者にしても、イタリア語の親族語である英語訳の方が日本語訳よりも原書の意味に近いニュアンスを伝えてくれるものとして、英語訳版を使用したが、欧米の批評家の多くと同じ立場にあることに変わりはない)。意味伝達と解釈という点では、他にも考慮すべきことがある。作品自体がラテン語を交えた多言語で書かれていること、アトソンの回想録という形式が時間の経過による記憶の変質という問題を含んでいること、また内容がアトソン自身の視点から捉えられていること等である。彼自身は、「自分が見たまま聞いたままを一語一句そのまま繰り返し、そこから敢えて一つの意図だけを汲みあげようとせずに、いわばやがて来る後の世の人びとのために(もし反キリストが最初に来ないかぎりは)徴の徴として、いつの日か読み解かれんことを願いつつ、ここに書き残しておこう」(Eco 1980：11)と記している。しかし、一見客観的に見える映像が「不透明で歪曲的で恣意的な表象のメカニズムを隠蔽する、自然さと透明性を装った欺瞞的外見、イデオロギー的韜晦」(Mitchell 1986：８)であるのと同様に、個人的な語りには情報の取捨選択、整理、解説を通して主観的なフィルターがかけられていることを現代の読者ならば熟知しているであろう。このように、私たちが入手する情報の真相とは、何重にも間接化され、不確定な性質のものであるという大きなフレームワークのなかで諸問題が提示されているのである。

III　二項対立世界の反転する評価を巡って

さて、ウイリアムとアトソンが修道院内で見聞き話題にする多くの事柄は、対立する二つの見解、ないしは勢力と、不透明な契機によりきまぐれに逆転するその区別や評価の問題と関係している。異端――正統、平信徒――僧、皇帝派――教皇派、俗界――聖界、清貧の教義を支持する教会セクト――否定するセクト、笑いを肯定する者――否定する者、等々の対立の構図は、解釈の立場により容易にその意味合いが反転するのである。

アトソンの師ウイリアムが異端審問官の職を辞したのも、これまでの明確な対立項の絶対性を信じられなくなったためである。例えばウイリアムにとって、天使と悪魔、あるいは異端者と聖者の区別は、一旦その共通性に目をやると曖昧なものへと変化してしまうと

考えられるのだ。天使の情熱も悪魔の情熱も極限にまで意志を燃焼させる点で差がなく、絶対的な極限を目指す点では、神も悪魔も区別がない。そして絶対的な極限への志向には、常にその他のものの排除や差別という問題点がつきまとうのである。異端者においても、彼らの苦悶への欲望がその賛嘆や謙虚の情熱を傲慢や反逆へ振り替えてしまうが、そうした彼らの弱さはまさに聖者の弱さと同質のものである、とウイリアムは考えるに至るのだ(60)。

あるいは、聖なるものと俗なるものはその類似性ゆえに、簡単にすり替えが起きる。キリストとの体の触れあいを通してフォリーニョのアンジェラ(Angela of Foligno)が感じた肉体の人間的な戦慄を、至高者との対話がもたらす戦慄と錯覚することはたやすい。あるいは、マリアの愛に象徴される超自然の愛(230)、汚れなき愛、良き愛と、感覚の陶酔との区別は難しいのだ。アトソンも、修道院で名も知らない村の娘と生涯でただ一度の関係を結んだのちに、その時の喜びと聖者たちが語ってきた歓喜との間に差を見出すことができないことに気づく。「そのとき自分の味わいつつあったもの以上に、正しく、善で、尊いものは、他にありえなかったから」(247)「天上の贈り物」と考えられるが、「人の魂を奪い、すべての肉体を惑わす」が故に「悪魔の罠」(246)とも解釈できる。結局、アトソンが辿りついた結論は、立場によって意味が反転する世界である。つまり、男女の愛は「互いに相手を結びつけ..... 両者をただ一つの肉体たらしめ、合一させては新しい人間存在を生み出させ、若者から年寄りまで互いに助け合うようにさせる」(279)から、他の人々には「甘美な善の極み」となるが、彼のように欲望からの救済を求めて禁欲生活を送る修道僧には悪となるのである。

雄鳥が悪魔の象徴にも、復活したキリストの象徴にもなるように(101)、記号はもともと曖昧な性質をもつ。細密画家アデルモ(Adelmo)が詩編読本に施した飾り絵では、日常感覚とは逆の世界が展開されている。野兎の前で逃げ出す猟犬、獅子を追う牝鹿、尖塔の天辺に家並があり、空の上に地面が拡がった絵等々――これらは「あたかも真実の言説と一般に規定されている言説の周縁に、それと深くむすびつきながらも、驚嘆するような謎にみちた隠喩によって、逆立ちした宇宙についての虚偽の言説を展開してゆく」(76)のである。この絵は、物の見方、換言すれば遠近法的視点を周縁にずらせば、意味が反転することを示している。

同じ作用はアトソンの夢に現れた『キュプリアヌスの晩餐』の再現世界にも見られる。カルタゴの司教キュプリアヌス(Cypriani)が３世紀に書いたとされるこの著書は、聖書の一種のパロディーで、カナの婚礼の祝宴に旧約・新訳聖書のあらゆる主要人物が集まるという設定になっている。そこでは、聖書に記されている多くの言葉が歪められ、あるいはあべこべにされ、無意味な行動をとる滑稽な人物の集まりの観を呈している。そのため、笑いや滑稽味を論じる際の中心的テキストとなってきたと言われる。アトソンの夢では、僧院での数日間の出来事や人物が、「晩餐」に出てきた逆立ちした世界と混交することで、同じ効果を与えていると考えられるのだ。ウイリアムは彼の奇妙な夢を次のように分析して、これまで学んできた教えや意味が効力をもたない反転した世界を知ったことが夢の原因となっていると述べている。

“.... And finally you asked yourself, in the dream, which world is the false one, and what it means to walk head down. Your dream no longer distinguished what is down and what is up, where life is and where death. Your dream cast doubt on the teachings you have received. ”(438)

このように事物の意味を反転させる機能をもつ滑稽味や「笑い」は、不動の普遍的世界

を望む者にとっては脅威となる。修道院で展開された犯罪の動機は、この種の脅威を排除することにあった。父なる神が築いた世界は凍結した形で維持されねばならないと考え、それを最大の使命とするホルヘ(Jorge)は、笑いを忌み嫌う。キリストは笑ったこともないし、喜劇の話しをしたこともなかったとか、笑いは人の顔を歪めて猿のようにする愚かさのしるし、といったホルヘの笑いを否定する理由(209－10)は、表面的なことに過ぎない。むしろ彼が本当に恐れていたのは、笑いにみられる意味を逆転させる作用と、アリストテレスの『詩学』第二部の喜劇論がその作用を正当化していることなのだ。アリストテレスは笑いの作用を次のように述べているという。

We will show how the ridiculousness of actions is born from the likening of the best to the worst and vice versa, from arousing surprise through deceit, from the impossible, from violation of the laws of nature, from the irrelevant and the inconsequent, from the debasing of the characters, from the use of comical and vulgar pantomime, from disharmony, from the choice of the least worthy things. (468)

アリストテレスによれば、「笑いを誘う傾向は、善を生む一つの力であり、認識の価値を高めることもできる」(472)。事物の現実の姿を異なった風に見せることで、より正確に事物を見直させ、今まで気づかなかった別の面を知らしめるからだ。このとき、「笑いは〔より厳密にものを見つめ直す〕方法に高められ、それに向かって学者の世界の扉は開かれ、哲学の対象となり、不誠実な神学の対象ともなる」(474)。笑いが庶民の気晴らしとして、憂さを発散させることで彼らの欲望や野望の衝動を吸収する点においては、ホルヘは笑いを許容している。だからキリスト教会では祭日や謝肉祭や祝宴という一定の期限のなかでだけ、笑いが許可されているのである。しかし、「父なる神」の言葉という絶対的、かつ不可侵な神聖の領域までも笑いの対象として人間的なパロディーの域内におとしめることは許容できない。そのようなことをすれば、「あらゆる聖なる尊ぶべき図像の性急な解体と逆転」(476)、つまり中心と周縁が逆転されるのだ。

But on the day when the Philosopher's word would justify the marginal jests of the debauched imagination, or when what has been marginal would leap to the center, every trace of the center would be lost. (475)

他方、ホルヘと対峙するウイリアムは、ある意味で確定的な解釈を拒む立場にいると言えるが、彼の視点から見ると事態は逆転し、ホルヘこそ悪魔であり、反キリスト者と映るのである。ウイリアムが結論として導き出したこと――「悪魔は精神の傲慢さ、笑うことを知らない信仰、決して疑惑に取りつかれることのない真実にある」(477)、「別の側から事物を見ること」(478)の重要性、「唯一の真理とは、真理に対する病的な情熱から私たちを解放する方法を学ぶことにある」(491)等――は、認識論的な相対主義を重要視するポストモダニズム的主張に近いものと解釈することができよう。

Ⅳ　ニーチェ的な「権力への意志」が生み出す意味と価値

アトソンが解説する歴史的背景からは、意味や価値を左右する主要な因子としての権力作用も鮮明となっている。1316年に選出された法王ヨハネス(John) 22世と、1314年に選出された二人のドイツ皇帝のうちの一人、バイエルンのルートヴィッヒ(Louis)皇帝との勢力闘争には、教会側と世俗社会の複雑な利権関係の影響が窺えるのである。当時アヴィニョンに法王庁を構えていたヨハネス22世は、腐敗し肥大化した教会官僚制の長として多くの従者を従え、華美で贅沢三昧な暮らしを維

持するために、聖職売買の横行を許し、他勢力の弾圧政策をとっていた。弾圧の対象には、分裂した多くの教会セクトも含まれている。なかでも清貧問題に関して、フランチェスコ修道会が、キリストも使徒たちも厳正な清貧生活を送り、私有財産も共有財産も所有していなかったという見解を1322年に正式に宣言したことは、法王の大きな脅威となっていた。1323年の大勅書『クム・インテル・ノンヌッロス』(Cum inter nonnullos)をもって、フランチェスコ修道会を異端として弾劾し、(小説の事件の)後に、多数のフランチェスコ会士を幽閉の後に屈服させたことは史実である。清貧を説く多くの托鉢修道士や平信徒も、教会の清貧を主張しているが故に異端とされた。しかし「己の〔法王側〕の統率力の内部に収めきれる異端、またあまりに強力な存在となって敵にまわしては具合が悪い異端」(203－4)は正統として認めるという具合に、その区別はきわめて恣意的であった。他方、ルートヴィッヒ皇帝を頂点とする世俗勢力側は、当時台頭してきた都市国家の新興商人や職人組合、また急増した貨幣、交易、製品を背景に法王の支配権の弱体化を画策している。皇帝側がフランチェスコ修道会と手を結んだのも、同修道会が法王と衝突していたためであった。皇帝側は、聖職者への憎悪をかき立てるために聖職者を殺害した者に莫大な罰金刑を処した。また、僧院で使用する言語、ラテン語に対抗し、都市の言語となりつつある俗語の浸透を図って、『福音書』を俗語に訳すカタリ派を支持した。さらには、聖職者が独占する特権的身分をなくすためにヴァルド派を支持した。しかし彼らもまた法王側と同様に、これら異端勢力や托鉢修道士に対し自分たちの都合次第で恣意的にその処遇を反転させてきたことには変わりがない。両勢力が恣意的に決定する「異端」、「正統」のレッテルがその表れである。作品では、この二大勢力の秩序構造に対し、社会から排除された周縁者たちが作る第三の勢力を登場させることで、その恣意性がさらに明らかにされている。第三の勢力、すなわち社会の最下層にいる貧しく無教養な多くの平信徒には、異端と正統を区別する能力もないし、多くの教会セクトを選別する余裕もない。ただ、たまたま彼らの土地で説教した者に惹かれ、現状からの脱出を願っているだけである。「素朴な平信徒たちはいわば家畜のようなものです。権力者が敵対権力を危機に陥れるために役立つときにだけ利用され、もう利用できなくなると生け贄に捧げられてしまう」(152)とウイリアムは評している。いったん視点を変えれば、そこに浮かびあがるのは異端と正統の境界が消滅した世界でしかない。セクトからセクトを渡り歩いて生涯の大半を過ごしてきたサルヴァトーレ(Salvatore)は、「〔両者のあいだの違いという〕問題に関して、明快な意見を言えなくなってしまった」(190)と告白し、それを聞くアトソンにもすべてが同じように見えてくるのでる。

こうした歴史的背景とそれを眺める登場人物の意識には、ニーチェが「権力への意志」と呼んだものと、そうした権力作用の真相を認識したことから生じる事物の境界や意味の消滅というポストモダニズムに見られる意識と共通したものがある。アレックス・カリニコスはポストモダニズムに見られるニーチェ的テーマを次のように要約している。

. . . running through the whole of nature, including the human world, is what Nietzche called the 'will to power', the disposition of different power-centres to engage in a perpetual struggle for domination whose outcomes alter both the relationships fundamentally constitutive of reality and the identities of the parties to those relationships;... Nor is thought itself exempt from this struggle:... the only attitude appropriate to the seething heterogeneity of the actual world is perspectivism, which recognizes every thought as

an interpretation, valid only within a conceptual framework the grounds for whose acceptance lie not in any supposed correspondence with reality, but in the purpose, construable ultimately in terms of the will to power, which it serves.

（Callinicos 1989 : 64－５）

さまざまに異なる中心的権力は、覇権を目指して果てしない抗争を繰り返しており、いずれかの権力が支配権を握ると、現実を基本的に構成している関係も、そうした関係に属する党派の性格も、思想の意味すら変わってしまう。このような現実世界に渦巻く異種混交性を判断する唯一の適切な姿勢とは、遠近法主義であるが、それはあらゆる考えの解釈をそれぞれの特定の枠組みのなかでのみ有効と見なしている。その解釈が受け入れられる根拠は、現実に一致しているか否かではなく、覇権勢力の目的にかなっているかどうかにあるのだ。

Ⅴ　多元的世界が作る認識の迷宮

二大勢力による権力闘争の問題から離れて作中に渦巻く異種混交性に目を向ければ、事物はさらに多様な意味をもつ多元的世界として浮かびあがる。

僧院長の指輪は、権威の象徴、重い責任の象徴、神聖な言葉の名言集を表しているが、さらに、そこにはめ込まれたさまざまな宝石もまた多様な解釈を有している。例えば紅縞瑪瑙は、彼にとって殉教の徴で、聖バルトロメオを思い出させるが、連祷では、処女の生活の平穏を表し、聖ブルーノにとっては幟天使を意味し、他の高僧にとっては別の意味をもつ。事物は読みとった解釈により、置かれた文脈次第で、幾つかの複数の真実を表すが、それが一定の解釈の水準に達しているか、正しい文脈に置かれているかを決めるのは、最も信頼され、それゆえ最も威信をもった権威者なのである。

The language of gems is multiform; each expresses several truths, according to the sense of the selected interpretation, according to the context in which they appear. And who decides what is the level of interpretation and what is the proper context?... it is authority, the most reliable commentator of all and the most invested with prestige, and therefore with sanctity.（448）

エーコは『開かれた作品』において、「開かれた作品」という概念を導入し、複数の解釈が可能な芸術作品とその解釈の問題を述べている。この著書の序文のエーコの説明によると、「西洋人が不変と信じ客観的世界構造と同一視してきた伝統的秩序の崩壊」（Eco 1967：13）を背景に生じた無秩序、すなわち「偶然・不確定・蓋然・曖昧・多価値による挑発」に対して、現代芸術は折り合いをつけようとした。その結果、現代芸術はこうした無秩序をただやみくもに軌道を逸したものと捉えず、新たなる秩序をもたらす可能性を秘めた豊穣な無秩序として受け取けとろうとした。エーコも同じ意図をもって『薔薇の名前』の多元的世界を創造したと思われる。本作品の執筆にあたり、エーコはあらゆる種類のテクストから多数のファイル・カードやフォトコピー、本を用意し、「乱雑に投げ出されたあらゆるテクストを手近に置き、絶えず目をあれからこれへと走らせ、ある箇所をコピーしては、すぐさま他の箇所にそれをつなげた」（Eco 1983：48）ことを述べている。事実、イツケルト（Ickert）やシック（Schick）などの批評家が指摘しているように、本作品には『ヨハネの黙示録』、『ソロモンの雅歌』、『ヨハネによる福音書』、『キュプリアヌスの晩餐』、『カルミナ・ブラーナ』，イシドール（Isidori）の『語源誌』、『ミケーレ・ミノリタ修道士の話』、ヴォルテールの『ザディグ』等々のおびただしい書物からの引用が指摘できるのである（Ickert，Schick：117－201）。また、間接的な影響にまで視野を拡げると、ボルヘス、コナン・ドイル、エドガー・アラン・ポー、フロ

ーベール、ジョイス等々と、これまた数多くの作家が考えられる。こうして利用された作品による間テクスト性は、多くの事柄を一義的な意味に帰することを拒み、ある時には出典となったオリジナルがもつ意味との違いから作品にアイロニカルな色彩を与え、またある時にはアトソンが気づくように、「まるで本同士が語りあっているかのように、しばしば本は本について語る」(286)ことから生じるさまざまな意味が付加される。このような重層的な意味に加えて、先述の宝石の例に見られるように作品では事物は多義性が与えられている。エーコが本のタイトルに「薔薇」という語を入れた理由にしても、薔薇という言葉がもつ多義性にある。「神秘なるバラ(ダンテ)、バラ戦争、バラ物語、バラの生を生きたローザ、あくまでもバラであるバラ(ガートルード・スタイン)、バラ十字会員、すばらしいバラの優雅さ、芳しい新鮮なバラ、別名で呼ばれるバラ..... 等々」――「バラがあまりに濃密な比喩的意味に富む象徴であるために、ほとんどすべての意味を失っているから」(Eco 1983 : 5)であった。過剰な意味をもたされているがゆえに結局は何も意味しない表象とは、いわばシニフィエとシニフィアンとが乖離した状態、ボードリヤールのいう「意味の内破」した世界であり、それはポストモダニズムの特質ともなっているのだ。

このような多元的な意味の産出項がもたらす認識の迷宮世界を象徴しているのが修道院の図書館である。事実、修道院の最長老アリナルド(Alinardo)は、「図書館は巨大な迷宮だ。この世が迷宮である証だ。図書館に入ったら、出口はわからなくなる」(158)と述べ、小宇宙としての図書館を、一つの具象された迷宮として捉えている。図書館は、世界に関する知識の貯蔵庫として、キリスト教世界だけでなく異教徒世界の書物を古今東西から収蔵しているのだが、その性質を表すかのように内部は複雑に入り組んだ無数の部屋に分かれ、書物の配置も混沌としている。図書館に置かれた幻覚を引き起こす薬草や，事物をそのまま映さない特殊な鏡、不規則な各部屋の出入口、入り口の所在が不明な秘密の部屋等々が、さらに迷宮としてのイメージを強める。エーコは自らこの図書館の特質を分析して、バロック・マニエリスム期の迷宮・迷路であると解説している。この迷宮に入ると、人は「一種の樹木(多数の枝や幹や袋小路から成る)構造に出くわすものである。一つだけ出口があるのだが、それは容易に見つからない。迷子にならないためには、アリアドネの糸を必要とする。この迷宮は試行錯誤過程の一つのモデルなのだ」(Eco 1983 : 62)。しかし、それと同時に、この図書館に入ったウイリアムとアトソンが意識する「完全に方向感覚を失ってしまった」(176)という感覚には、ポストモダニズム特有の超空間が人々に与える感覚と同質のものがあると考えられる。ジェイムソンは、ポストモダニズム独特の体験をロサンゼルス中心街にあるウェスティン・ボナヴェンチュア(Westin Bonaventure)ホテルに言及して解説している。全てを備えた一つの完全な空間ともいえるこのホテルは、まったく同じ形の四つの塔と、一つの巨大な開口部付き中央大広間があり、修道院の図書館の見取り図を思い出させる。ジェイムソンによると、ホテルの超空間は「自分の位置を突き止める人間の能力、すなわち、目前の周囲の状況を知覚として、また認知として系統立てて理解した結果、地図として表された外的世界のなかに自分の場所を表記するという人間の能力を最終的に超越するのに成功しているのだ」(Jameson 1991 : 44)。旧来のモダニズムに見られる「判読しやすい」(Lynch 1960 : 2)都会の空間と異なり、多国籍資本主義からなる現代社会は、複雑で相互依存し、時には不合理で二律背反的に、あるいは断片的に見え、個々の人間の主体の方向感を失わせてしまっ

た。それは、あらゆる異質の蔵書を収めた図書館が人に与える影響と似ている。そして、これまで述べてきたように、ウイリアムとアトソンは、象徴としての図書館の存在を含め、多くの宗教セクトや権力が渦巻く異種混交の世界から多元的意味、事物の境界の消滅、容易に反転する価値といったポストモダニズムとも共通する世界を体験してきた。その意味でエーコ自身の指摘とは異なり、ウイリアムだけでなくアトソンも、マニエリスム風の迷宮と同時に、リゾーム構造の迷宮もさまよってきたと言える。ドゥルーズとガタリの概念であるリゾーム(根茎)の迷宮は、「多元的な網目状に結合し合っているので、どの通路も他のいずれとも結びつくことができる。潜勢的に無限であるのだから、中心も、周辺も、出口もないのだ」(Eco 1983：62)。

Ⅵ　モダニズムとポストモダニズムの相補性

バスカヴィル(Baskerville)のウイリアムは*The Hound of the Baskervilles*の名探偵シャーロック・ホームズを、彼の弟子アトソンはワトソン博士(Adsoのつづりは Watsonと類似する)を暗示しており、本作品は修道院での殺人事件の捜査をおこなう探偵小説の形態をとっていることは、すでに多くの批評家が指摘していることである。この探偵の仕事でもっとも大切にされるのは、厳密に論理的手順を踏んで明晰な推理をおこなうことであり、そこでは合理的な理性の働きへ全幅の信頼が寄せられている。その意味では、ウイリアムはさしずめモダニズムの寵児とも言える存在であろう。彼は故郷の町オックスフォードで自然科学を研究し、哲学者・自然科学者として経験学を提唱したロジャー・ベーコン(Roger Bacon)を師匠とした。また、当時の最新科学技術である「めがね」を使用し、羅針盤の知識にも通じ、因果律にそって帰納法的論法から物事を説明する姿勢をとっている。作品冒頭の方で紹介される行方不明の馬ブルネッロ(Brunellus)のエピソードは、まさに彼の鋭い推理力を見事に証明している。彼は、雪の上に残っている馬の足跡と折れた木の枝だけを手がかりに、馬の行方のみか、名前や種類、外見的特徴もすべて言い当てることができたのである。これはモダニズムに見られる啓蒙の論法が有効である証となる。

だが、肝心の修道院での５人の死者に関する推理についてみれば、モダニズムの因果律に基づく秩序への信奉から、彼は一連の事件を「ヨハネの黙示録」に沿った殺人計画、つまり一つのプロットを表すシナリオと解釈したために、大きな誤算を犯してしまったことに気づく。

“ There was no plot, ” William said, “ and I discovered it by mistake. . . . I arrived at Jorge through an apocalyptic pattern that seemed to underlie all the crimes, and yet it was accidental. I arrived at Jorge seeking one criminal for all the crimes and we discovered that each crime was committed by a different person, or by no one. I arrived at Jorge pursuing the plan of a perverse and rational mind, and there was no plan, or rather, Jorge himself was overcome by his own initial design and there began a sequence of causes, and concauses, and of causes contradicting one another, which proceeded on their own, creating relations that did not stem from any plan. Where is all my wisdom, then?. . . pursuing a semblance of order, when I should have known well that there is no order in universe. ”(491－２)

現実には、原因の鎖は複雑に錯綜した流れを派生して勝手に一人歩きを始め、結果的には初期の企てとは無縁な偶然の作用を招く。秩序などこの世界にはないのだ。ここにおいて、ウイリアムの悟りはポストモダニズムの世界観と一致する。彼のこの悟りを根拠に、ブライアン・マクヘイルは、本作品をポストモダ

ニズム特有の「反推理小説」(McHale 1992：150)と位置づけ、理性の破綻とアイロニーを読みとっている。しかし、アトソンが反論しているように、明晰な理性による推理から、ウイリアムは多くの真実を探り当てたことも事実である。アデルモの死因を自殺と論証し、ヴェナンツィオ(Venantius)の大壷のなかでの溺死を否定し、図書館の迷宮構図を解き、「アフリカの果て」の入り口の開け方を実際に解決し、一連の事件の根幹にアリストテレスの本を特定したのは、ウイリアムの合理的な理性の働きに負っているのである。

またウイリアムには、伝統的な事物のあり方を鵜呑みにせず、批判する重要性を説くモダニズムの啓蒙の精神も見られる。こうした精神によって、知の貯蔵庫となる図書館についてホルヘが掲げる古典的論理の問題点をあぶり出したのである。ホルヘにとって、図書館の僧侶の仕事とは「知の保管」であって、「探究」ではない。何故なら知の特性は神聖なもので、初めから完成され決定されている。「知の歴史にあっては、時代による進歩も、変革もなく、せいぜいで継続する崇高な反復があるだけなのだ」(399)。このように、知を永遠不変の揺るぎない砦としてとらえ、それを脅かす何ものも受け入れないホルヘの古典的考え方には、社会・文化の変化など歓迎できるはずもない。

それに対し、ウイリアムは既述したように笑いの精神に見られる、批判する心、既成の考え方を逆転させて新しい見方を導く精神を賞賛している。さらには本論Ⅲ章、Ⅳ章、Ⅴ章で考察してきたように、笑いの精神だけでなく、諸々の二項対立世界に対する反転する評価、権力作用がつくり出す意味と価値、多元的世界における認識の迷宮といった諸相の問題点を明るみにだしたのも、ウイリアムの事物を見つめる啓蒙の批判的理性に負っている。モダニズムの哲学的側面を表すとされる啓蒙は、一般にあたかも統一された一枚岩の運動のように捉えられ、そのイメージが真実と進歩のある種の権威主義的考えを表すとされるようになった。しかし、クリストファー・ノリスによると、啓蒙は本来矛盾に満ちた運動である。そして、啓蒙は人々に何を信じるべきかを語っていない。人々がすでに信じていることをもっと批判的に考えるように、その方法を示唆しているのだ。つまり、その核には批判の精神が共通して見られるのである。

But the Enlightenment was nothing if not a movement devoted to criticism and debate.... It doesn't tell people what to believe; it is about suggesting ways that they might think more critically about what they already believe.... But what Kant was actually saying was: 'Take nothing as gospel. Criticise everything, including what I am saying now and my own philosophical ideas and beliefs'. That is the core of the Enlightenment: perpetual self-criticism, taking nothing on trust. (Norris 1998：21)

以上の点からも判るように、本作品ではモダニズムの価値は決して無効ではないし、否定されているわけでもない。ただし、部分的には有効であっても、全面的には肯定できない。また、ある状況では通用しても、普遍性はないという条件が付けられているのだ。それは、最後にウイリアムがたどりついた次のような結論にも窺うことができる。

The order that our mind imagines is like a net, or like a ladder, built to attain something. But afterward you must throw the ladder away, because you discover that, even if it was useful, it was meaningless. (492)

上述の結論は、ヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』の〔6・54〕の一節――「私を理解する読者は、私の書物を通り抜け、その上に立ち、それを見おろす高みに達したとき、ついにその無意味なことを悟るにいたる。まさにかかる方便によって、私の書物の解明を

おこなおうとする（読者は言うなれば、梯子を登り切ったのち、それを投げ捨てなければならない）」（Wittgenstein 1922：199－200）――を思い出させる。モダニズムの批判的理性は、皮肉にも自らのモダニズムの限界を自覚させ、ポストモダニズム的認識世界を導いたことになるのだ。

だが他方では、ポストモダニズム的世界にも問題がないわけではない。それは、死を目前に控え、本作品の執筆を終えようとしている晩年のアトソンの胸中を伝える最終章において、微妙な形で表れている。そこに浮かび出るアトソンの意識は、死の影に覆われ、中世末期の虚無感、神秘主義を色濃く反映している。イツケルトとシックが指摘しているように、それはヨハン・ホイジンガの『中世の秋』、ことに第16章「神秘主義における想像力の敗退と実念論」や「死の舞踏」の世界である（Ickert, Schick 1992：189－94）。神の存在は言葉の面ではもはや積極的に把握することができず、「完全な無相性」（Huizinga 1919：405）という否定的な面においてのみ経験可能なものとなってしまっているのだ。しかしその反面、アトソンの世界は驚くほどポストモダニズム的思考と共通していると考えられる。例えば、アトソンは焼け落ち廃墟と化した修道院を後年に再訪し、図書館の瓦礫のなかから切れぎれの書物の紙片や画像を集めて、「大規模な図書館の記号としての小規模な図書館」（500）を再構成したことに言及している。そこに見られる「断片的な語句、引用文、不完全な文書という切断された手足の書物から成り立っている」ものとは、まさにポストモダニズムの世界である。しかも、アトソンはそれらが「偶然の産物であり、何のメッセージも含まれていない」（501）と捉えているが、偶然と、意味の解釈を拒むサインという認識もやはりポストモダニズムの特質である。ここに示された完全に破壊され、断片しか残らない「小規模な図書館」を、新たなる豊穣を約束する創造的破壊と解釈することは不可能なのだ。また、アトソンに無上の喜びを与えた生涯で唯一人の女性を表す薔薇は、最終的に「stat rosa pristina nomine, nomina nuda tenemus〔過ギニシ薔薇ハタダ名前ノミ、虚シキソノ名ガ今ニ残レリ〕」（502）という思いに集約されている。「薔薇」は今や何ら実体を伴わないもの、つまりシニフィエとシニフィアンが完全に乖離してしまった世界をアトソンは実感するに至っているのである。さらには、かつて修道院でアトソンがウイリアムに問いかけた疑問――「もし真理の基準それ自体が失われてしまえば、伝達が可能な知識はもはやなくなってしまうということでしょうか、それとも相手がその意見を認めないだろうから、貴方の知っている事柄をもはや伝達できないだろうということでしょうか。」（492）――は深刻な形となって彼に返ってきている。多元的な真理として捉えられる現実や意味のもとでは、確固としたコミュニケーションは失われてしまうからだ。アトソンは彼の回想録に「自分が記した文字が何らかの隠れた意味を含んでいるのかどうか、またそれは一つ以上の、あるいは多くの意味を含んでいるのか、それとも何も意味などないのか、それすら判らないのは、老僧にとって酷いことなのだ。」（501）と記している。ここでアトソンが意味しているのは、エーコが「開かれた作品」と称する多様な解釈を許す芸術作品に彼の回想録が属しているのか、否かといった疑問ではないのだ。確固とした意味が見つけられない世界とは、彼を待ち受ける死の世界と同様に、平等も不平等も含めあらゆる差異が認められない、意味が失われた沈黙の荒涼たる世界と同質のものであるということなのだ。

I shall sink into the divine shadow, in a dumb silence and an ineffable union, and in this sinking all equality and all inequality shall be lost, and in that abyss my spirit will lose itself,... all

differences will be forgotten. I shall be in the simple foundation, in the silent desert where diversity is never seen, in the privacy where no one finds himself in his proper place.（501）

世界の多様性と恣意的な意味や価値観を体験したアトソンとウイリアムは、モダニズム的な見方の限界を知って、ポストモダニズム的視点を獲得した。しかし、それは不確実さを容認することで認識論的な相対主義をもたらし、アイロニックな超越や神秘主義的な虚無感を助長して、批判の根拠を切り落としてしまう。それは悪くすると、合理的な批判によって社会的、文化的諸問題を解決したり、諸々の制約からの人類の解放を目指す啓蒙の論法に見られるような建設的姿勢を封じてしまうのである。

Ⅶ 結論

ポストモダニズムの姿勢は、非常に教養ある女性を愛しているのだが、彼女に「ぼくは狂ったように君が好きだ」とは言えない男性の態度のようなものだ、とエーコは述べている（Eco 1983：76）。何故なら、この台詞をすでにバーバラ・カートランドが書いていることを彼女が知っており、また男性自身も知っていることを彼女が知っていると男性は察知しているからだ。その場合、「バーバラ・カートランドも言ったように、ぼくは狂ったように君が好きだ」と表現する解決策がある。つまり、過去の知の集積によってすでに無邪気さが失われたポストモダンの時代においては、もはや無邪気なしゃべり方はできないことを互いに了解している。それでもなお、男性は偽りの無邪気さを回避しながら女性に対する愛を告白し、女性もそれを受け入れる手段が残されているのである。過去や既成の真理に対して挑戦を常に行って来た結果、ポストモダニズムはアイロニー、メタ言語、偽装の二乗といったさまざまな技法のなかで事実に対応せざるをえなくなっている。さらには、現実社会の複雑多様な側面に対しては、認知に基づく新しい地図製作すら必要とするようになった。ジェイムソンの言葉を借りるならば、「旧来の種類の機構への復帰、すなわち、昔のより透明な国家という空間や、より伝統的で安心できる物事の見方、ないしは模倣的な飛び領土（エンクレーブ）への復帰」（Jameson 1991：54）はもはや不可能となったために、新しい表象の様式が求められているのである。こうした意味では、アトソンとウイリアムも同じ立場にいると言えよう。たとえ背景は中世であっても精神風土は似ているからだ。ヨーロッパ各地の遍歴や修道院での体験を通して二人が遭遇した諸々の事柄――聖界と俗界、正統と異端、規範と通俗、抑圧と解放、伝統と非伝統、等々――の区別を決めているものは、権力作用や偶然、恣意的な取り決め、見解の相違であり、両者の明確な境界線は消滅してしまった。一旦それを知った以上、二人は無邪気な昔に後戻りすることはできないのである。だが、これまでの伝統的な方法も、それなりの意義を有して機能していたことも確かである。こうした対立項の相補的機能を客観的に理解するためには、既成の事実を否定するのではなく、それに対してアイロニカルな再考を促すことが重要なのだ。『薔薇の名前』は、主人公が到達した新しい認識世界の肯定的側面という点では、ポストモダニズムの価値が賞賛されている。だがそれと同時に、モダニズムの掲げる普遍的な諸価値の幾つかは、アイロニカルな再考を経てなお維持され続けてもいると思われる。既成の意味や価値を見直そうとするウイリアムの批判的理性、アトソンの体験した愛、信仰の本質、社会の底辺で抑圧された庶民の解放――いずれもがリオタールがポストモダニズムでは消滅したと述べている「偉大なる物語」を継承していると考えられるからである。

参考文献

Baudelaire, Charles（1987（1863））『ボードレール全集Ⅳ』（*Selected Writing on Art and Artists*），阿部良雄訳、筑摩書房

Callinicos, Alex（1989）*Against Postmodernism : A Marxist Critique,* Cambridge : Polity Press.

Eco, Umberto（1997（1967））『開かれた作品』（*Opera Aperta*），篠原資明、和田忠彦訳、青土社

Eco, Umberto（1983（1980））*The Name of the Rose*（*Il nome della rosa*），trans. William Weaver, London : Vintage.

Eco, Umberto（1994（1983））『「バラの名前」覚書』（*Postille a Il nome della rosa*）谷口勇訳、而立書房

Harvey, David（1989）*The Condition of Postmodernity,* Oxford and Cambridge, MA : Basil Blackwell.

Hassan, Ihab（1985）'The Culture of Postmodernism', *Theory, Culture and Society,* Vol. 12 No. 3.

Huizinga, Johan（1967（1919））『中世の秋』（*Herfsttij der middeleeuwen*）堀越孝一訳、中央公論

Ickert, Klaus, Schick, Ursula（1992）『「バラの名前」百科』（*Das Geheimnis der Rose-entschlüsselt*），谷口勇訳、而立書房

Jameson, Fredric（1991）*Postmodernism, or, The Cultural Logic of Late Capitalism,* London and New York : Verso.

Lynch, Kevin（1960）*The Image of the City,* Cambridge, MA: Massachusetts Institute of Technology.

McHale, Brian（1992）*Constructing Postmodernism,* New York : Routledge.

Mitchell, W. J. T. （1986）*Iconology : Image, Text, Ideology,* Chicago : Univ. of Chicago Press.

Norris, Christopher（1998）Reason reawakens, *Red Pepper,* 45（February）.

Wittgenstein, Ludwig（1968（1922））『論理哲学論考』（*Tractatus logico-philosophicus*）坂井秀寿訳、法政大学出版局

The Coexistence of Modernism and Postmodernism — in the Case of Eco's *The Name of the Rose*

Postmodernism is considered to represent philosophical ideas, mainly derived from cultural formations associated with popular culture around the 1960s, and poststructuralist theory. While people are fully familiar with postmodernism phenomina nowadays, many problematic aspects have been pointed out on them, such as a cognitive and cultural relativism, epistemological pluralism, fractured identities, and the detachment of representation from reality, that is, the signifier from the signified. These characteristics make it possible to free us from the restraints of the traditional fixed interpretation and the hierarchical system of value and order. At the same time, however, they bring people the sense of disorder, anarchy, disorientation and meaninglessness. In this sense, postmodernism has to be grasped both positively and negatively. In order to escape from the negative aspects of postmodernism, and to make sense of aseemingly opaque yet ultimately intelligible world of postmodernism, it is important to reexamine not only postmodernism but also modernism which is still coexisting in our world, with a new point of view.

Umberto Eco, an Italian philosopher, historian, literary critic and novelist, understands postmodernism as an ethos, a way of behaviour in a critical age, and not as the philosophy which belongs to the present day, and describes various problems of postmodernism in his essays and novels, mainly from the point of semiotics. In this paper, I would like to discuss the positive and the negative aspects of postmodernism concretely, in comparison with modernism, focusing on Eco's famous novel, *The Name of the Rose.*

Keywords

postmodernism, modernism, indeterminacy, dichotomy, the will to power, pluralistic world, critical reason